

聴講記録 鳥居龍蔵の城山貝塚に関する講演

大橋 俊雄¹

はじめに

1922年（大正11）4月3日、鳥居龍蔵は故郷にある徳島公園⁽¹⁾で城山貝塚を発見し、4月20日から約半月の間、徳島市の依頼により発掘調査を指揮した。この出来事は、地元の新報でくり返し報道され人びとの注目を浴びた。鳥居もたびたび講演を行い、城山貝塚の意義を一般の人に向けて語りかけた。

本稿では、徳島県師範学校の図画科教諭であった須木一胤（1873～1936）が、鳥居による講演の内容を書き記した1冊の手帳（以下、「手帳」と表記する）を紹介する。現在この「手帳」は、一胤のほかの遺品とともに徳島県立博物館に所蔵されている。鳥居による講演は、彼の言葉をかりると、通俗的に説明し概要を話すにとどまるものであった。しかし「手帳」の記述から、鳥居が城山貝塚についてなにを考え、地元民にどう伝えたかを窺い知ることができる。

資料の概要

「手帳」は、無地の洋紙を用いた手製の折本で、縦11.0 cm、横8.4 cmを測る。頁数は表裏あわせて50面あり、本稿では仮にアラビア数字の頁番号を振る。本文は鉛筆で縦書きされるが、行が通常と異なり左から右へと送られる。この変則的な行送りは、一胤のほかの遺品に例がなく、採られた理由が明らかでない。

講師は、3頁と4頁に「私」、42頁に「余」と記されるのみだが、鳥居と見て問題ない。日付と会場も示されないが、この点は次のように推定される。まず22頁に土器片2点が図示され、「昨日第二号ヨリ出タルモノ」とある。これらは1922年（大正11）8月14日に採拓され、森敬介が『徳島公園城山第二貝塚遺物集』（徳島県立図書館蔵）に拓本を綴じた土器片である⁽²⁾。また同年10月17日に阿波名勝会が発行した『阿波名勝』第3号に、「去る八月十五日徳島市主催の講演会」で、鳥居が話した内容の一節が引かれている。真鳥利臣は、発掘に参加した前田正一の自筆日記から、同年8月15日に徳島公園千秋閣において、徳島市主催で鳥居が「徳島公園の遺跡に就いて」の講演をしたと指摘している⁽³⁾。

「手帳」は、1922年（同11）8月15日に、城山貝塚のそばにある千秋閣で行われた、徳島市主催の講演会「徳島公園の遺跡に就いて」の聴講記録と考えられる。8～9頁に「諸君ト共ニ第一号ヨリ掘リタルニ」とあり、会場には発掘に加わった人たちがいて、鳥居の話聴いていたと思われる。

一胤と「手帳」執筆の背景

「手帳」を残した一胤について略述する。子孫の方がお持ちの履歴書類によると⁽⁴⁾、一胤は本名を治郎吉といい、1873年（明治6）5月5日に徳島県徳島市北山路町で生れた。原籍と住所は徳島市富田浦町字東富田708番地ノ2である。1892年（同25）7月に徳島尋常中学校を卒業したが、1890年（同

¹ 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

23) 9月から1896年(同29)3月までの5年7ヶ月間、富田浦町の画師佐香美古のもとで日本画修業をした。同年4月に徳島県尋常中学校教員を命じられ、同校第一分校に勤務した。担当は図画、地理、英語であったが、実際は図画と英語を受け持ったようである⁽⁵⁾。1898年(同31)7月に同校助教諭となり、1900年(同33)12月に徳島県脇町中学校教諭となった。第一分校、脇町中学校はともに現在の徳島県立脇町高等学校である。1902年(同35)7月に徳島県師範学校の図画科の教諭となり、1922年(大正11)3月に徳島県立農業学校講師の嘱託を受けた。1925年(同14)11月に嘱託を解かれ、1928年(昭和3)3月に本職を免じられた。1936年(同11)1月12日、徳島市富田浦町東富田708番地ノ1で没した。逝去地の表示が原籍・住所と若干異なるが、場所はほぼ同じであろう。享年64歳である。

ところで徳島の地は、江戸時代には大名の蜂須賀家が治めていた。徳島公園は、蜂須賀家が居城としていた徳島城の跡地であった。この城は、1871年(明治4)の廃藩置県で無住となり、1875年(同8)に建物が破却され、大正の頃には石垣や堀などが残るのみであった。

蜂須賀家では、旧藩主の茂韶(1846～1918)が1918年(大正7)2月10日に亡くなり、子の正韶(1871～1932)が襲爵した。旧藩士族の有志が襲爵を祝い、徳島城の復元図を制作して正韶に贈ることを決め、一胤が作図を引き受けた。一胤は城跡の地形を写生し、建物の平面図、櫓などの古写真、土地の古老の証言をたよりに復元を試みた。しかし作業が難航し、贈呈は5年後の1923年(同12)にずれ込んだ⁽⁶⁾。

鳥居が城山貝塚を発見し、発掘を指揮した1922年(同11)は、徳島城復元図が蜂須賀家に贈られる前年にあたり、図がまだ一胤の手を離れていなかったと推測される⁽⁷⁾。一胤が徳島公園での貝塚発掘につよい関心を持ち、鳥居の講演に熱心に耳を傾け、記録したのも当然といえよう。

(注)

- (1) 現在の徳島中央公園。徳島県徳島市徳島町城内1番外に所在する。
- (2) 拓本の写真は、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会(2020)所収の拙稿に掲載しているので参照されたい。
- (3) 真鳥(1970)による。
- (4) 具体的には、一胤が1928年(昭和3)以後に書いた履歴書、1922年(大正11)4月に書いた教員検定願の控、過去帳と思われるものの一胤の箇所であり、それらの複写を子孫の方から県立博物館が載いている。
- (5) 実際の担当科目は、徳島県立脇町高等学校創立百周年記念事業実行委員会百年史編集委員会(1996)による。
- (6) 復元図制作の経過については、注(2)拙稿を参照されたい。
- (7) 実は、当館が現在作成中の「鳥居龍蔵年譜」の記事から、復元図が仕上げられた時期と鳥居との具体的な関わりを知ることができる。ただし当年譜の公開を期して今は触れない。

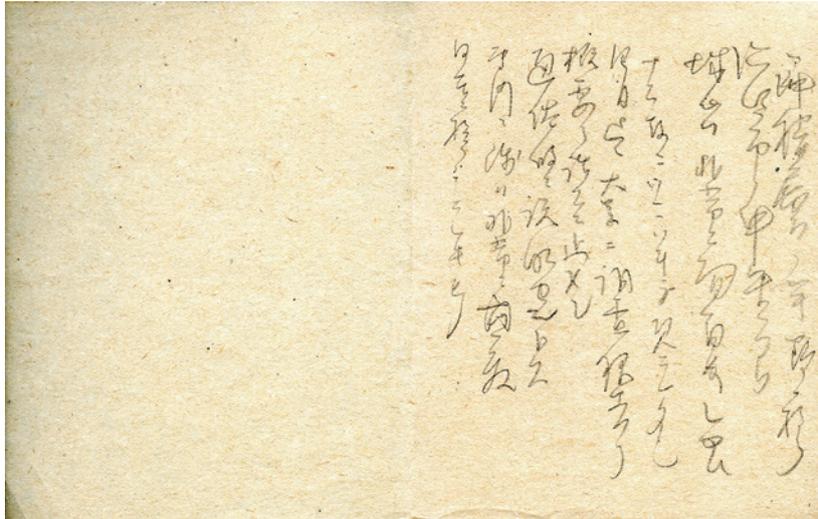
参考文献

- 天羽利夫 1994 「城山貝塚」「徳島城」編集委員会編『徳島城』 徳島市立図書館
 阿波名勝会 1922 『阿波名勝』3 阿波名勝会
 笠井新也 2010 「城山貝塚発掘記」『青藍』7 考古フォーラム蔵本
 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 2020 『文化財調査の先覚者 鳥居龍蔵、徳島を探る』 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会 2020 『鳥居龍蔵の学問と世界』 株式会社思文閣出版

- 徳島県立脇町高等学校創立百周年記念事業実行委員会百年史編集委員会 1996 『脇町高校百年史』
脇町高等学校創立百周年記念事業期成同盟会
- 鳥居龍蔵 1923 「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育画報』16-5 同文館
- 真鳥利臣 1970 「鳥居博士と阿南調査—その軌跡を辿る—」『鳥居記念博物館紀要』4 徳島県立鳥居記念博物館
- 森 敬介 1922 「徳島公園城山石器時代遺跡」(草稿)
- 森 敬介 1922 『徳島公園城山第二貝塚遺物集』(拓本)
- 湯浅利彦 2017 「徳島市城山貝塚発掘調査の復元的研究(上)—鳥居龍蔵による1922(大正11)年発掘調査の出土遺物の様相—」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』3
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 湯浅利彦 2020 「徳島市城山貝塚発掘調査の復元的研究(下)—鳥居龍蔵による1922(大正11)年発掘調査の出土遺物の様相—」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』4
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

資料翻刻

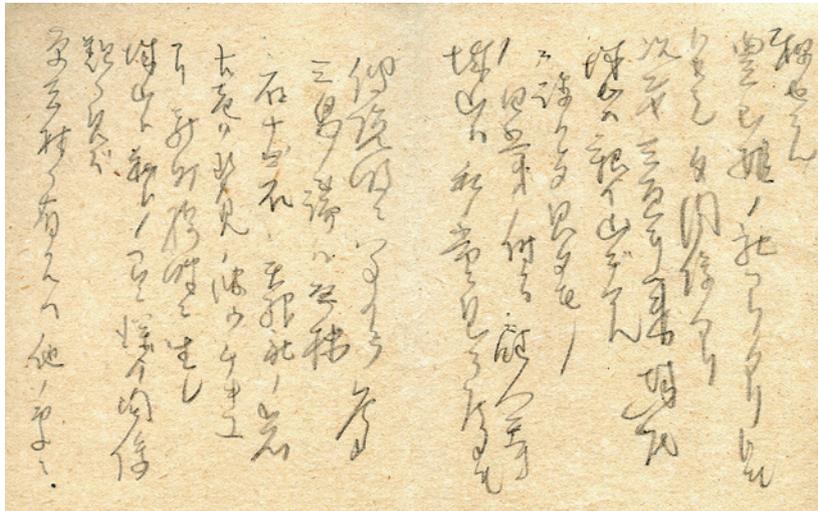
1



2

テ沖積層ノ平野ニ於テ
 徳島市ノ中央ニアリ
 城山ハ非常ニ面白イシカル
 ナス故ニ之レニツキテ見ラレタシ
 四月迄ニ大学ニ調査報告ヲ
 概要ヲ話スニ止メン
 通俗的ニ説明セントス
 専門ニ涉リ非常ニ凶散
 日本ニ於テメツラシキモノ

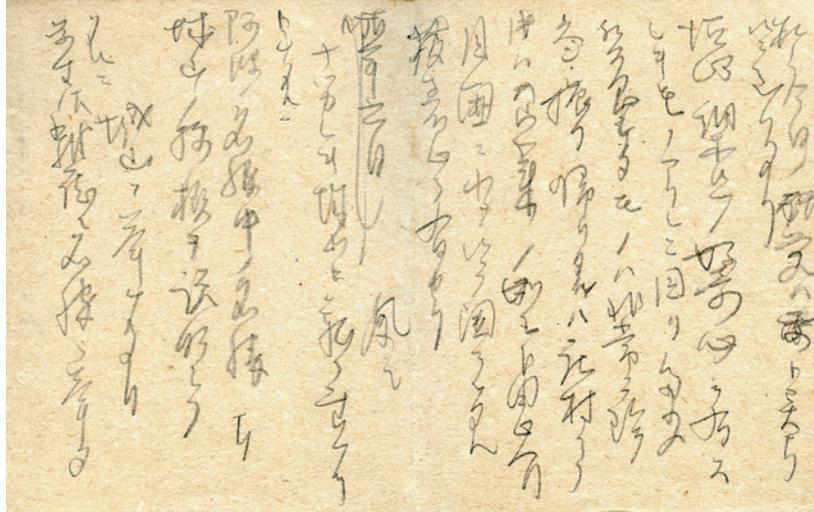
3



4

称セラル
 豊玉姫ノ社アリケリトモ
 トセラレタ関係アリ
 況ンヤ三百年来城居
 城山ハ親イ山デアル
 ニ誘ハレテ見タモノ
 ノ四五才ノ時分雇人等
 城山ハ私ノ常ニ見テ居タモ
 伝説的ニ聞イテ居タ
 三島ノ端ハ兼ノ林
 石ナす石 天神社ノ岩
 古老ハ勢見ノ波ウチキユ
 アリ新町橋畔ニ生レ
 城山ハ私トノ間ニ深イ関係
 類ヲ見ズ
 原志林ヲ有スルハ他ノ処ニ

5

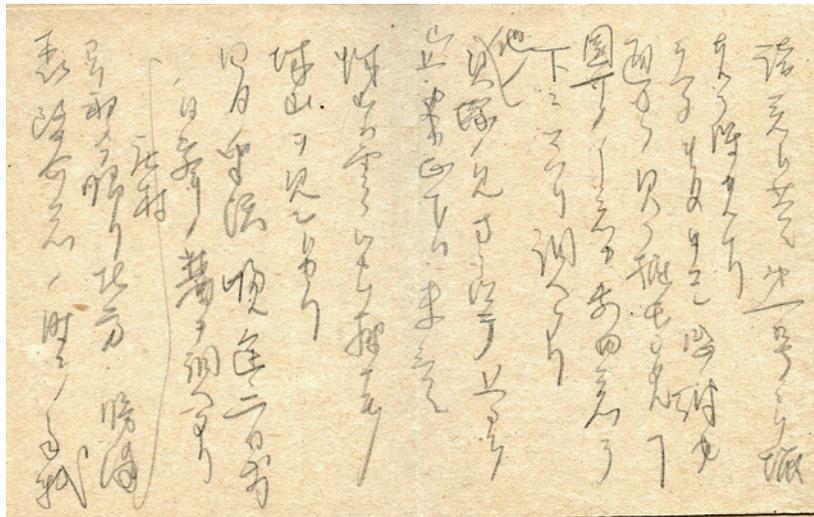


頓ニ今回ノ研究ハ前ト異ナリ
ルニ至リタリ
徳島調査ノ好奇心ヲ有ス
シキモノアリシニ因リ多少
発見シタモノハ非常ニ珍
適振り帰リタルハ庄村ナリ
トキハハウ菜ノ如シト思ヘリ
周圀ニ水ヲ以テ固ラレタル
執着心ヲ有セリ

昨年六月 （報脱カ） 夙ニ
ナツカシキ城山ヲ新ニ書ケリ
トシタル
阿波ノ名勝中ノ名勝ナリ
城山ノ様概ヲ説明シテ
タルニ 城山ヲ拳ケタリ
学生ナル雑誌ニ名勝ヲ拳ケ

6

7

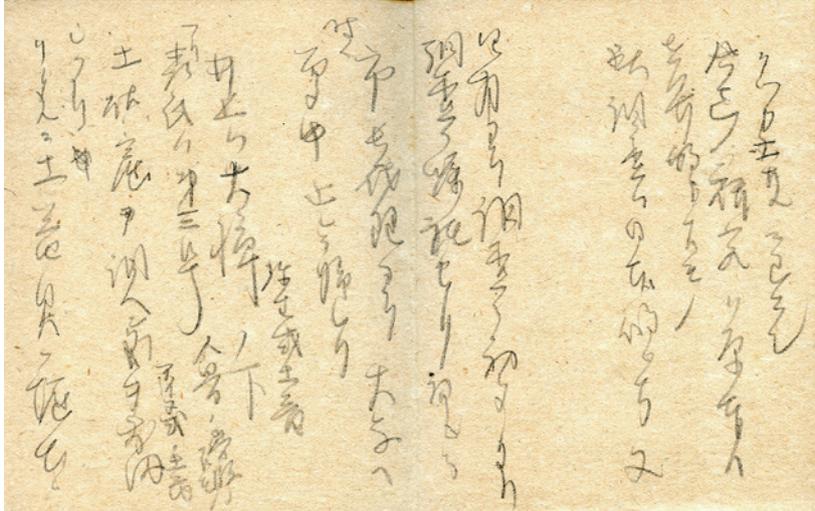


諸君ト共ニ第一号ヨリ掘
サルヲ得サルナリ
ヲ聞キタリコレ感謝セ
通シテ貝ヲ掘出シタルコト
園丁ノ——君カ前田君ヲ
下ニマハリ調ヘタリ
他ノ
貝塚ノ見方ヲ以テ上ヨリ
山上山下ハ未三ツニ
城山ハ雲ヲツカむ様ナモノ
城山ヲ見ントセリ
四月ノ半頃帰ル途ノ二日前
日峯ノ麓ヲ調ヘタリ
庄村
ヨリ初メテ帰リ北方 勝瑞
森敬介君ノ時々ノ手紙

8

9

10



ツツカエザルニ至ラン
今迄ノ研究ハ原本ハ
世界的トナルモノ
此調査ハ日本のトナリ又

四月ヨリ調査ヲ初メタリ
調査ノ囑託セリ受テ

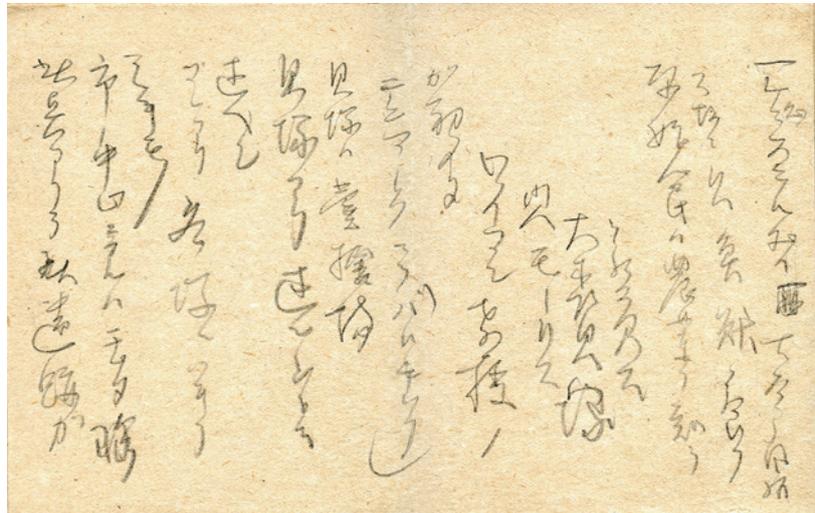
市長代理ヨリ大学へ
雨^{時々}テ中止シテ帰レリ

弥生式土器
井上ハ大樟ノ下
森氏ハ第三号人骨ノ骨肢ノ

アイヌ式ノ土器
土佐窟ヲ調ヘン匠ヲ前田
シタリ
リタルニ土器片ヲ掘出

11

12



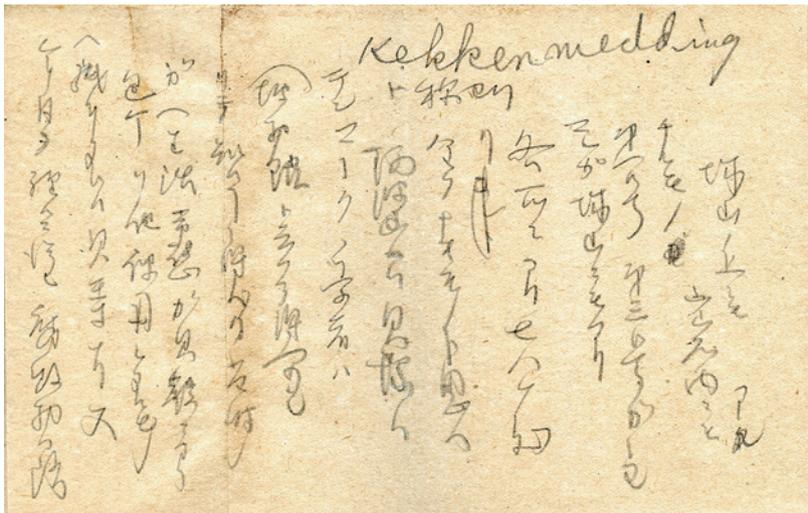
一ヶ処ニステル処ハ古今ノ風習
ス故ニ貝魚獸ヲ食テ
原始人民ハ農業ヲ知ラ
ヲ発見ス

大森貝塚
門人モーリス
ワイマン教授ノ
ガ初メタ

テンマークニテ(バルチック)
貝塚ハ層捨場
貝塚ヨリ述ベントス
述ベン
コレヨリ各條ニツキテ
ラシキモノ
市ノ中心ニアルハ甚タ珍
此点アリテ此遺跡ガ

13

14

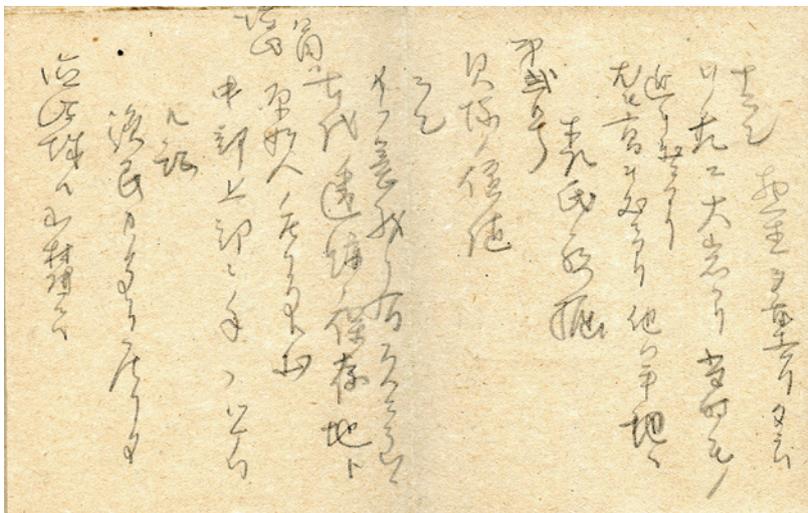


城山ノ上ニモ アル
山ノ岩内ニモ
タルモノ
第一号 第三号ガ主
コレガ城山ニモアリ
各所ニアリ七八ヶ処
リ
全クナキモノト思ヘ
阿波国ニハ貝塚ハ
テンマークノ学者ハ
(博物館ト云フヲ得可シ
(ママ)
リテ知ルコトヲ得ベク当時ノ
ガ (生活常態ガ貝類ニヨリ
包丁ソノ他使用シタルモノ
へ残りタルハ貝等ナリ又
年月ヲ経ルニ従ヒ腐敗物ハ消

Kekkenmedding
ト称セリ

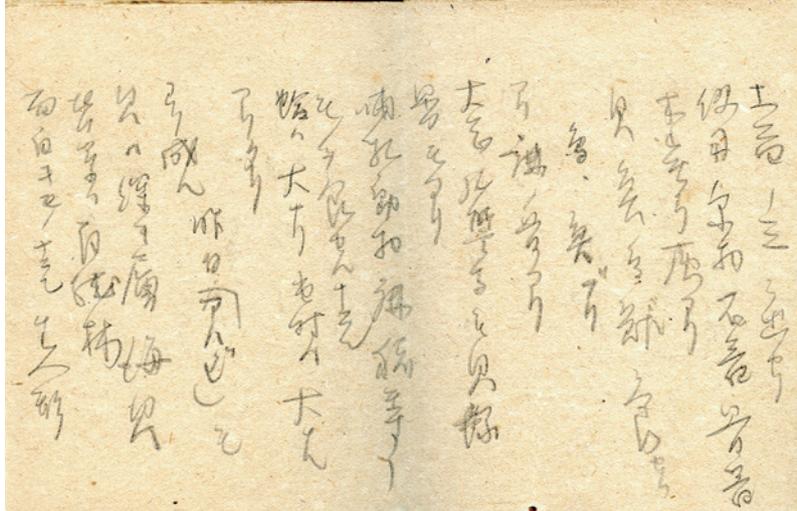
15

16



ナラン物置ヲ取去リタラハ
ソノ左ニ大岩アリ当時ノモノ
近キ処ニアリ
尤モ高キ処ニアリ他ハ平地ニ
森氏ノ発掘
第貳号
貝塚ノ価値
ラン
イフ意義ヲ有スルニ至
古代遺跡ノ保存地ト
公園ハ
徳島 原始人ノ居リタル処
中部上部ニ手ヲツケハ
ル趾
漁民カ多ク居リタ
徳島城ハ山林地ナルハ

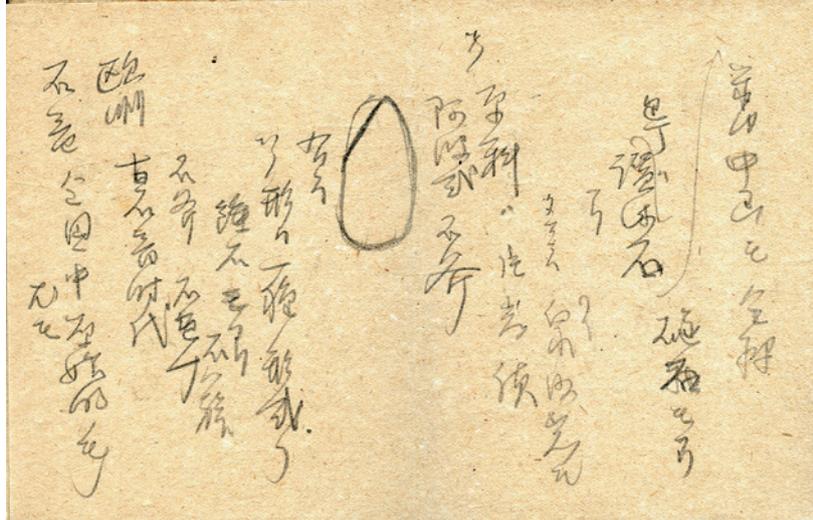
17



土器 ノミ ヲ出セリ
 使用ノ品物 石器 骨器
 木炭アリ 灰アリ
 貝 魚 鳥 獸 ヲ食セリ
 鳥 魚 ブリ
 アリ 鹿ノ骨アリ
 大岡弘誓寺ニモ貝塚
 骨モアリ
 哺乳動物 鹿 猪 等ノ
 モノヲ食セルナラン
 蛤ハ大ナリ 当時ハ大ナル
 アリケリ
 ヲリ成ル 昨日 (アハビ) モ
 貝ハ深キ層 海貝
 背景ハ自然林
 面白キモノナラン 真形

18

19

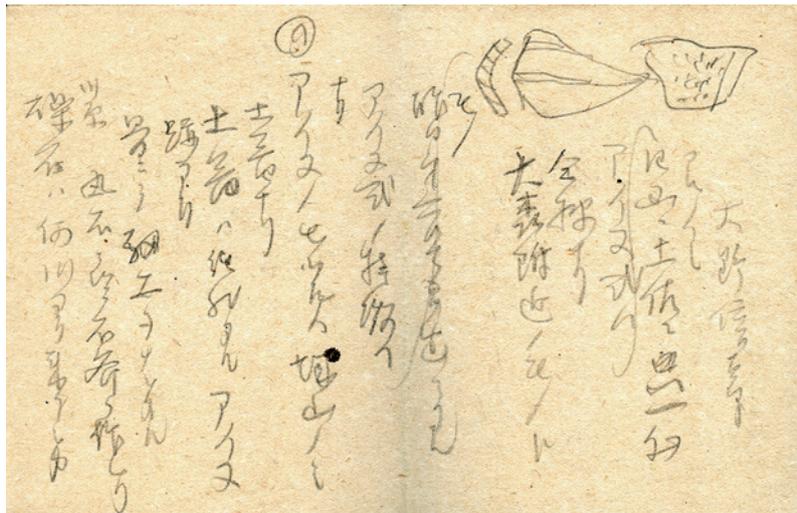


畿内中国モ同様
 包丁ハ
 讃岐石 燧石モアリ
 アリ
 タマニハ泉州岩モ
 ソノ原料ハ片岩質
 阿波式石斧
 有ス
 ソノ形ハ一種ノ形式ヲ
 鍾石モアリ
 石斧 石包丁 石鎌
 欧州古石器時代
 石器同国中原的ノモノ
 尤モ

20

21

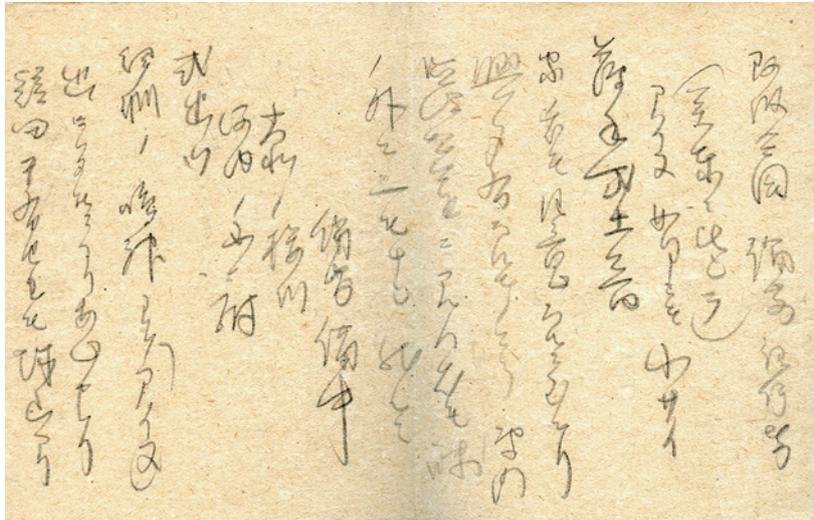
22



大野信太郎
アルノミ
四国ニ土佐ニ只一処
アイヌ式ハ
同様ナリ
大森附近ノモノト
モノ
昨日第二号ヨリ出テタル
アイヌ式ノ特徴ハ
ナリ
◎アイヌノ出ツルハ城山ノミ
土器ナリ
土器ハ純然タルアイヌ
跡アリ
骨ニテ細工ヲナシタル
川原 丸石ヲ以テ石斧ヲ作レリ
礫石ハ何川ヨリ来リシカ

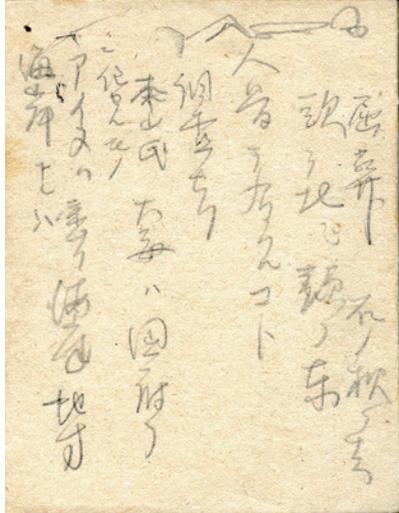
23

24



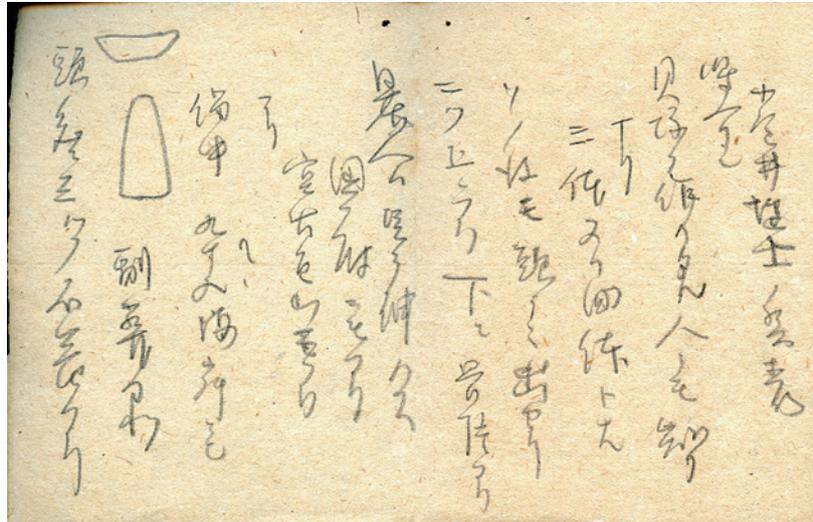
阿波同国 備前紀伊皆
(関東ニ比シテ)
アイヌ如何ニモ小サイ
薄手式土器
家ノ最モ注意スルニ至レリ
興ヲ有スルモノニテ専門
徳島公園ニアルハ尤モ味
ノ外ニ一モナシ然ルニ
備前備中
大和ノ桜川
河内ノ国府
式出ツ
紀洲ノ鳴神ヨリ(アイヌ)
出ラレタルニヨリ安心セリ
疑問ヲ有セシモ城山ヨリ

25



屈葬 石ノ枕ヲナス
 頭ヲ北ニ顔ヲ東
 人骨ヲ有スルコト
 調査セリ
 本山氏 大毎ハ国府ヲ
 ニ住セルモノ
 アイヌハ悉ク海岸地方
 海岸ナレハ

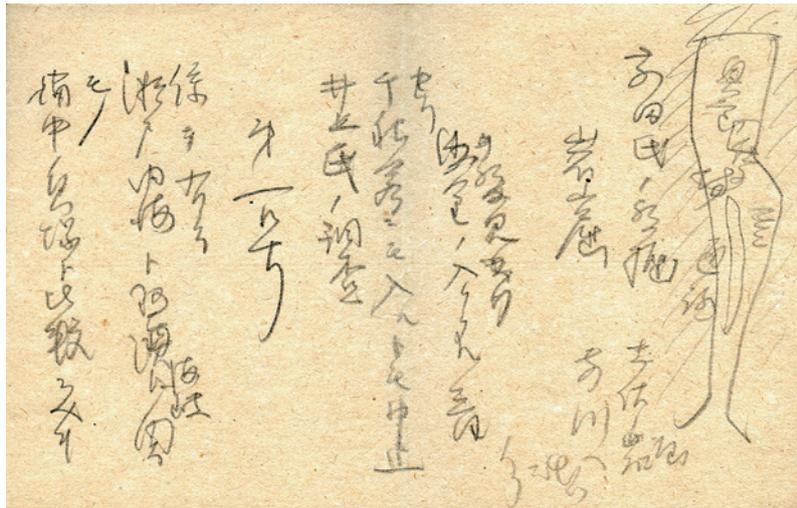
26



27

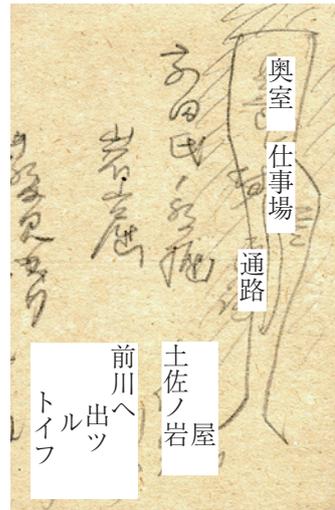
小金井博士発表
 得可シ
 貝塚ヲ作りタル人ノモ知リ
 ナリ
 三体又ハ四体トナル
 ソノ後モ頭ノミ出セリ
 ニツ上ニアリ下ニ骨片アリ
 日本人ハ足ヲ伸ハス
 国府ニモアリ
 宮古島ニモアリ
 アリ
 備中 九十九海岸ニモ
 副葬品
 頭ノ処ニ三ツノ石器アリ

28



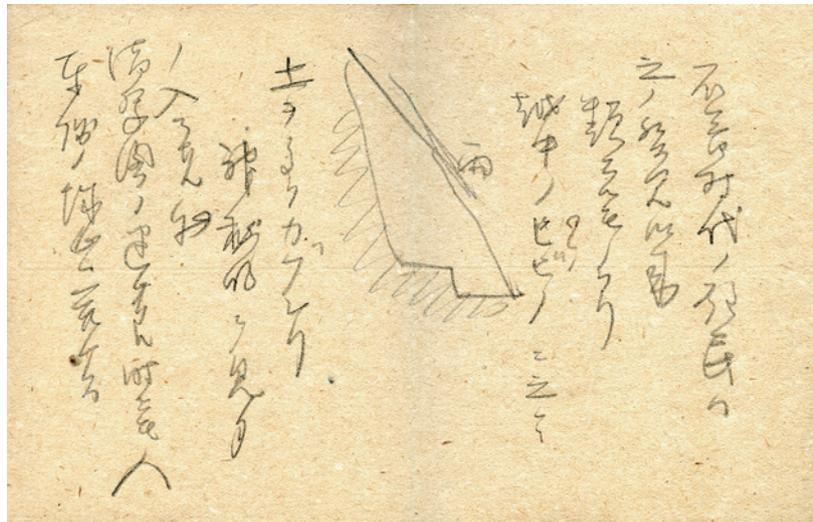
前田氏ノ発掘
岩窟
ヲ発見セリ
沙金ノ入りタル器
セリ
千秋閣ニモ入ルトモ中止
井上氏ノ調査
第一号
係ヲ有ス 海峡
瀬戸内海ト阿淡は関
モノ
備中ノ貝塚ト比較スベキ

29



奥室
仕事場
通路
前川へ
土佐ノ岩屋
出ツ
トル
トイフ

30



石器時代ノ住民ハ
之ノ発見以來
類スルモノアリ
越中ノヒビノニ之レニ
土ヲ多クカブレリ
神秘的ニ見テ
ノ入ラサル処
滴翠閣ノ建チタル時ニモ人
東側ノ城山ハ開ケス

31

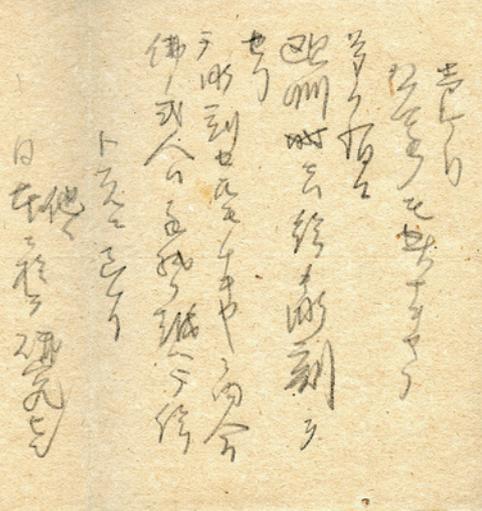


雨

32

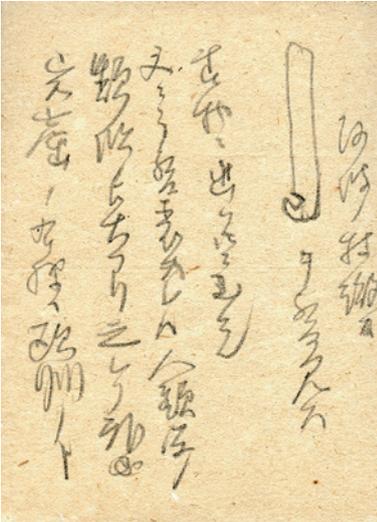


33

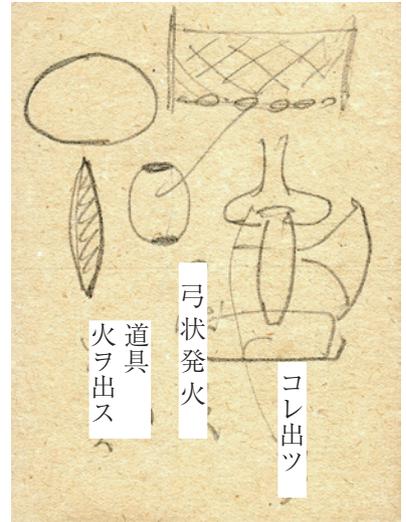


告ケリ
公園ノモ此ナキヤ
常ニ有ス
欧州ニハ絵ノ彫刻ヲ
セリ
ヲ彫刻セルモノナキヤヲ問合
仏ノ或人ハ手紙ヲ越ヘテ絵
トスルニ至レリ
他へ
日本ニ於テ研究セン
ニモ住セリ
自然ノ岩窟
イヒシカ
ナリト
竪穴

34

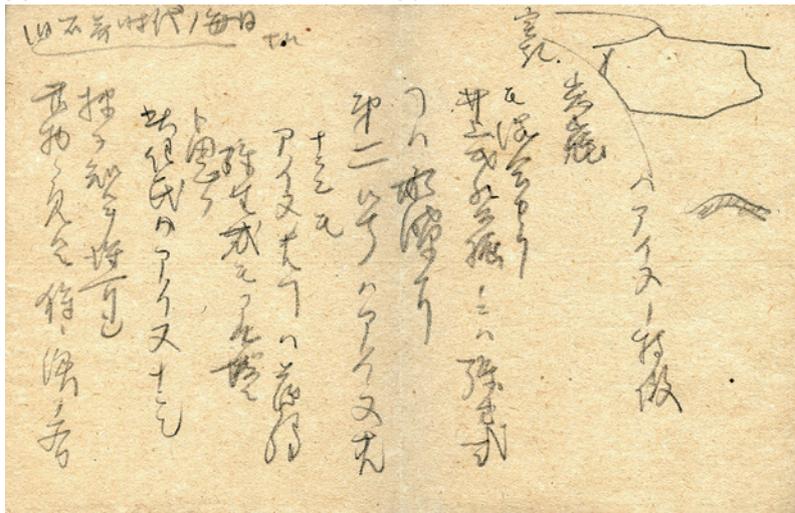


35



千葉ノ貝塚ニモアリ
阿波ノ特徴ハ
ヲ発見ス
書物ニ出ツルニ至ラン
文ニテ發表スレハ人類学ノ
類似ノ点アリ之レヲ外国
岩窟ノ有様ハ欧州ノト

36



37



旧石器時代の毎日ナル

書物ヲ見ルニ狩ト漁ノ有

様ヲ知ルヲ得可シ

此住民ハアイヌナラン

ト思フ

弥生式モアル故ニ

アイヌナルコトハ薄弱

ナランモ

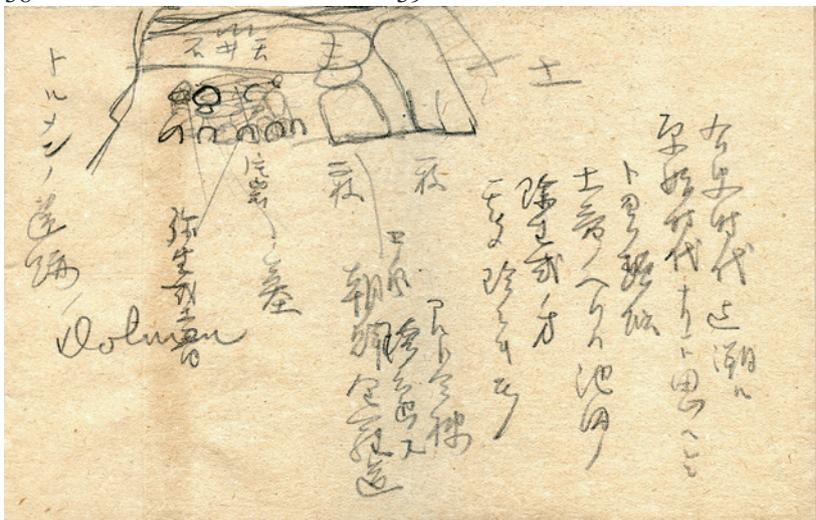
第二号ハアイヌナル

コトハ明瞭ナリ

井上氏発掘ノニハ弥生式

モ混合セリ

38



39

トルメンノ遺跡

Dolmen

朝鮮全羅道

コノ風 徳島ニ

アルト同様

甚タ珍シキモノ

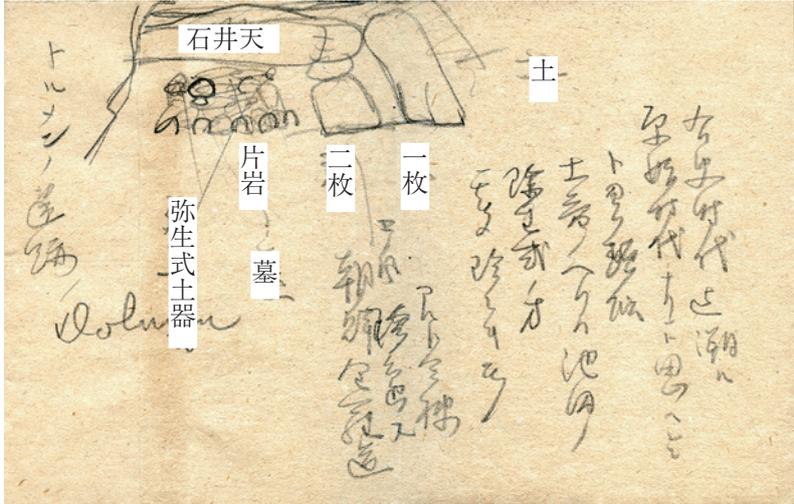
弥生式ノ方

土器ノヘリハ池田ノ

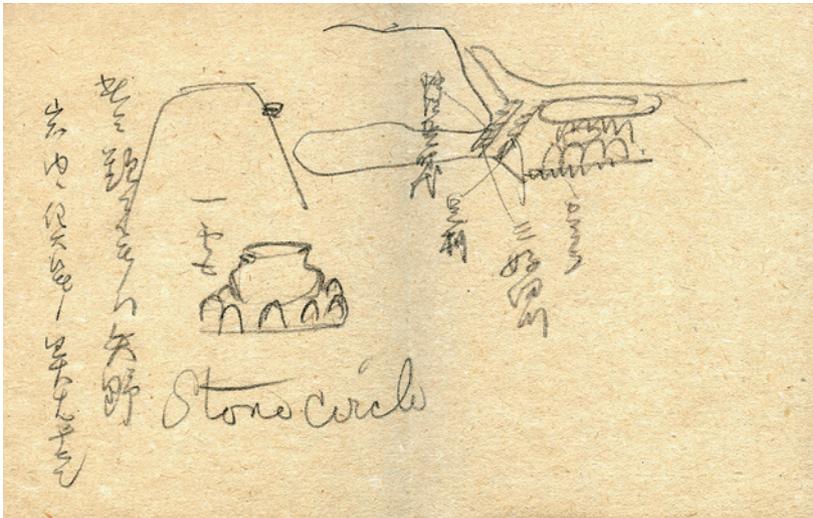
トヨク類似

原始時代ナラント思ヘルニ

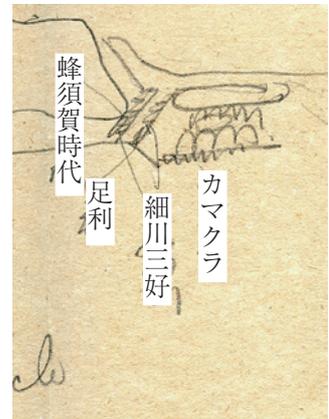
有史時代迄遡ル



40



41



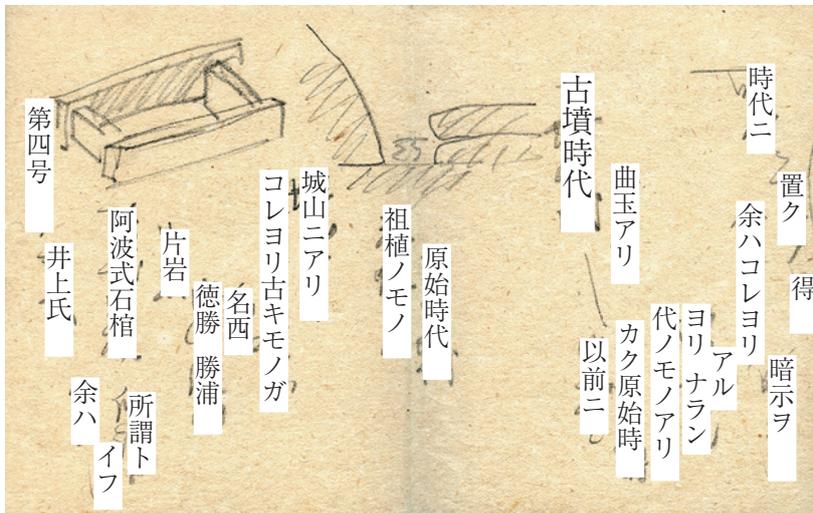
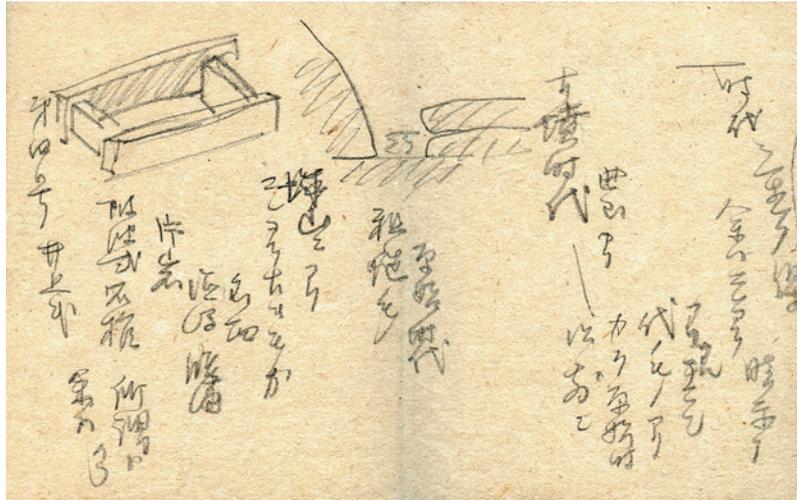
此レニ類スルモノハ矢野
岩内ニ住スルモノ異ナルナラン

一宮

Stone Circle

42

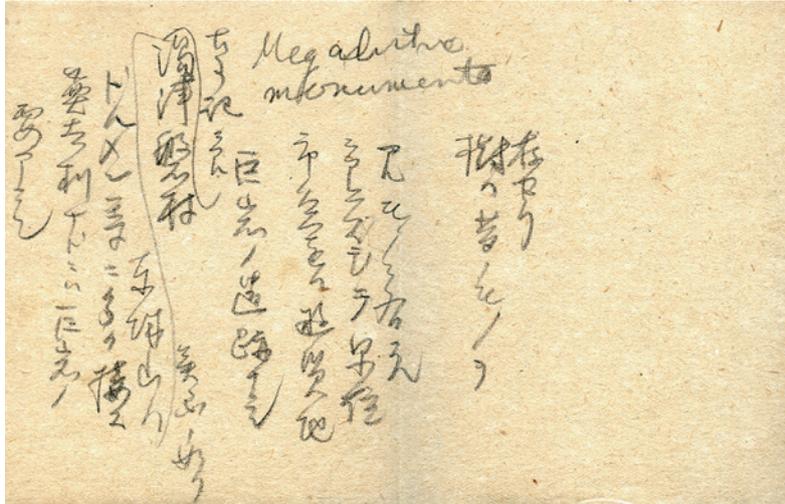
43



土

44

45



Megalithic monuments

存セリ
樹ハ昔ノモノヲ

アルモノヲ有スル
ニアラズシテ品位
市公園ハ遊覽地

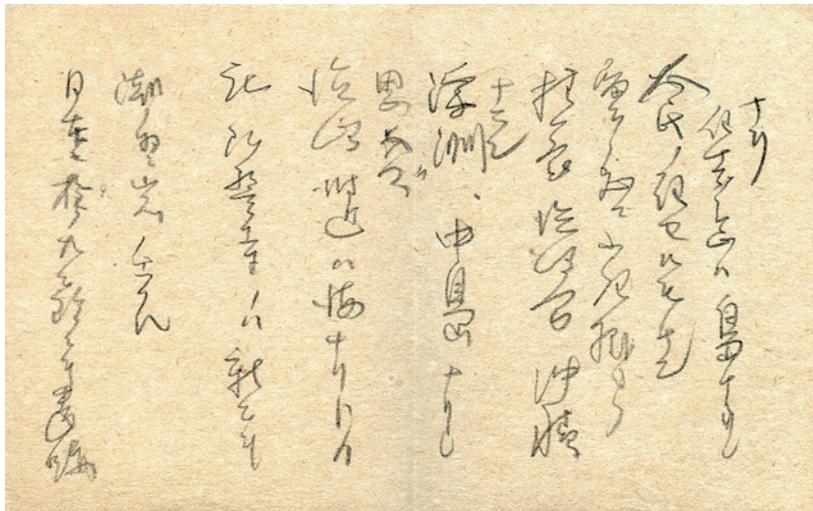
巨岩ノ遺跡ナラン

古事記ニアル
涓津磐村 東城山ハ
ドルメン等ニ多ク接ス
要アラン

英国ノ如ク
英吉利ナドニハ巨岩ノ

46

47



ナリ

住吉島ハ島ナリシ
人民ノ住セルモノナン
層ノ処ニ小屋根シテ
撫養徳島間 沖積
ナラン

浮洲、中島ナリシ
思ヘズ

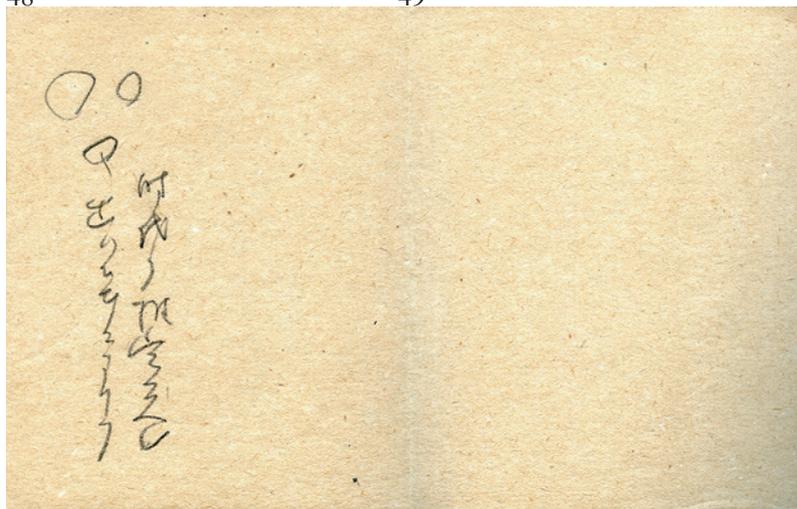
徳島附近ハ海ナリトハ
庄 弘誓寺ノハ新シキ

潮ノ為ニ岩ノエクル

日本ニ於ケル珍ラシキ遺跡

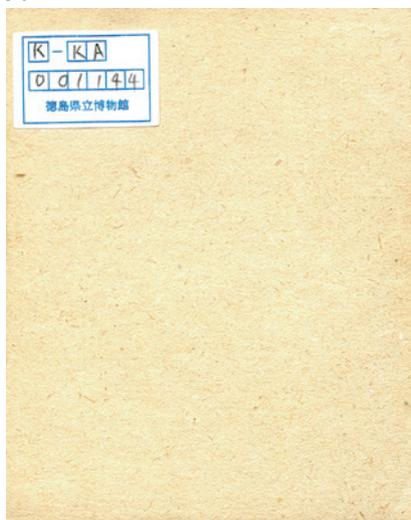
48

49



時代ヲ推定スヘシ
出ツルモノニヨリテ

50



土